

# 文盲

藤原 恵子

何か事があるたびに、私は直ぐ手紙を書きたくなる。

手紙は、自己主張を最も表現しやすい方法の一つだと思う。電話でも直接の対話でも相手に口を挟まれると、そこでスムーズな会話の流れは中断してしまう。それに比べると手紙は一方的で気が楽だ。

明治生まれの私の祖母は文盲であった。祖母には四人の娘と二人の息子がいた。「お願いがあるんだけど……けこちゃん、また手紙ひとつ書いてくださらんかい」祖母は同じ家に暮らす孫であるにもかかわらず、いつも低姿勢にそう云って、娘達への手紙を当時小学生だった私に代筆させるのだった。

四人いる内孫の中で、なぜ私が代筆する様になったのか、確かな記憶はないのだが、小学校の夏休み冬休みの宿題だった絵日記を私はいつも楽しんで書いていた。祖母はきつと、そんな様子を見ていたからなのだろう。

娘への色々な伝言を祖母が語る。傍で聞いている私はその内容を把握して手紙文にするとという作業は、嫌ではなかった。むしろ、楽しんで書いていた。ちゃぶ台の上で綴るひと時は、祖母と私の語らいの時でもあった。時々、話が逸れて祖母はよく自分の生い立ちを語り始めるのだった。

——明治生まれで貧しく育った自分には学問などは無縁であったこと。僅か十二歳で他家へ子守りの奉公に出され、そこで働いた賃金の代わりにもらった米や農産物をオッカサンの所に届けた——のだと。いつも母親のことをオッカサンと呼んでいた、亡き祖母が懐かしい。

晩年の祖母はいつも古風な柄の着物を着ていた。なで肩で着物がよく似合い、語る口元や横顔には品があった。ぽつりぽつりと昔を懐かしむように語るうちに、いつしか饒舌になっていく。その姿は普段の寡黙な祖母とはどこか違って見えるのだった。苦勞続きの中で、正直に生きてきた祖母の語りには嘘がなく真実味が伝わっ

てくる。

和菓子職人と結婚して子供を産み、事情で離別して、その後再婚して今があること。私は何度も同じ話をいろいろと聞かされたものだ。

祖母の舅は連れ合いが亡くなった後、先だった妻を追いつ自分の病気を苦に自らの命を絶ったという事実を始めて聞かされたのは私が小学生のときだった。後に位牌を見ると、一ヶ月のうちに夫婦の命日があった。夕刻になると井戸の傍でボーと立っているその爺さんの魂を何度か見たのだと秘密を打ち明けるように話をしてくれる。心霊的な話になると興味津々となり、白黒映画の一場面を見るように私は想像を膨らませて聞き入った。いつしか私は死後の世界、霊や魂の存在を信じるようになっていった。

ご先祖様のこと、神仏を尊ぶという、人として大切なことを無学の祖母から色々と教え諭されてきたように思う。

口述手紙は各家庭に電話が普及し始めるまで、つまり私が高校生になるまで続いた。

書いた手紙を読みあげると、「そんなことは言っていないでしょう」と言って、時々祖母からのクレームが入る。それは祖母の意に反して、私が勝手な解釈をして好きなように調子にのって書いてしまったときだった。決まって祖母は不機嫌顔になって優しい目が少し三角目になる。すると私の頬っぺたは少々膨れ、口先はちよいと尖がり仏頂面になるのだった。ちゃぶ台の上を消しゴムの屑だらけにしながら書き直しては再度読み上げる。そんな時の祖母は真剣に聴き入ろうとする、まるで耳をたてたウサギのようだった。

祖母の娘達からの手紙を読み上げるのも私の役目であった。叔母達からの手紙には所々に難解な文字があったりする。文盲の祖母をいいことに、中学生の私は前後の文章に辻褃合うように適当に読みあげたり、時にはその部分を抜かして聞かせることも多々あった。娘を案じる親心と、そこに聞き入る祖母。読み終えると、その文面に応えるように

「ああ、そおですかあ」と言って、しわがれた両手を擦りながら安堵の吐息を漏らす。最後に「はい、ありがとうございました」と、丁重にいう時の物腰はいつも柔らかかった。そこで、私はとても良いことをした気分になるのだった。

——私はお前の婆さんである、という自らの尊厳やプライドはその時の祖母からは

微塵も感じられなかった。——読めない——書けないという、文盲の祖母が私の傍らにただ居ただけだ。

作文力の未熟な私の書くおびただしい手紙文には気持ちにそぐわぬところも、きっと沢山あったはずなのだ。手紙は文盲の祖母にとって、遠方に住む我が娘達との音信をつなぐ唯一の手段だった。どんなに拙い文章でも、孫の私に代筆を頼み、そして届いた手紙は読んでもらうしかなかった。

そんな祖母にも唯一書ける文字があった。「こう書くんでしょう」と言って恥ずかしいそうに私の手の平の上でなぞるように祖母の人差し指がたどしくゆつくりと動く。

「と・ゆ」という二つの文字、それは祖母自身の名前だった。全く書けないと思っていた私には意外な発見だったのを覚えている。

当時の祖母の生きた時代とおかれた境遇、そして文盲の祖母を幼心に私はどう理解して見ていたのだろうか今回想する。

祖母のお陰で、私は手紙を書くということに億劫さを感じない習慣が自然に身につけていったのかもしれない。今は携帯やパソコンメールで、いとも簡単に情報や意志の伝達ができる時代になった。実に便利で手軽になったが、いまひとつ寂しいものを私は感じる。これからも私は、何かのお礼や報告にはハガキを利用するだろうし、メル友にもたまには、しつとりと肉筆の手紙を書くだろう。



藤原 恵子

北海道千歳育ち

結婚後、札幌在住  
現在に至る

主婦

二〇一〇年より執筆をはじめ  
二〇一一年 文学同人「昂の会」